

西鶴作品における典拠の問題（下）

——『武道伝来記』を中心に——

谷 協 理 史

六

『武道伝来記』の場合、すでに述べて来たその創作姿勢のために、その各話が種とした史実を究明することは、すこぶる困難であり、時には無理やり結びつけるという事態を生むことにもなりかねないわけである。とすれば、史実の追求を行なう際、そこには十二分の虚構化が行なわれているという前提を置いて慎重に究明されるべきなのは当然として、むしろ虚構と認定しうるものをより積極的に明らかにして行くことも必要となつて行くであろう。現在までの追求では、史実への探索が中心となり、古典等を利用して虚構化を行っているという点は黙殺されがちであるように見うけられるが、はたしてそれでいいのだろうか。今一例をあげてみよう。

巻八の一「野机の煙くらべ」の発端は、主君の葬礼の時の焼香の順序のことなどから遺恨を抱き、猪谷久四郎が国見求馬を討って立退く話である。この部分は、寛文十二年の市ヶ谷浄瑠璃坂の敵討の

西鶴作品における典拠の問題（下）

発端の史実をとり入れたものとして知られるが、場所・人名が全く変えられ、状況・事態が少なからず異なっているものの、著名事件でもあり、一応それをとり入れていると認めてよいであろう。

（ただし、ここまでは本章の約六分の一、以後の展開はこの敵討事件と全く関連を持たないから、この場合も又、史実を取り入れてはいても、それをごく一部に、しかもおぼろげにそれと感じさせる程度に利用しているにすぎないこと、明らかである）。が、同時に、この部分の記述に古浄瑠璃『舍利』の、焼香の順序争いから切合になる趣向の導入を見る矢野公和氏「『武道伝来記』の世界」（共立女子短大紀要・19、一九七五年十一月）の指摘も重要と思われ、黙殺せられてはならないであろう。この発端部においても、史実を史実らしく、あらわに書こうとする姿勢などは見うけられないのである。

ところで巻八の一は、敵討の発端は右の部分で簡略に記されるのみ、その中心が、求馬の遺児竜之助・虎之助の敵討であることは云うまでもない。求馬が久四郎に切られた時、兄竜之助は十一才、弟

虎之助は七才、二人は三年後に、下人角右衛門・文吉の二人をつれて敵討に出る。九年の探索の後、出羽の庄内に敵久四郎がいるのを聞いてそこに至り、「角右衛門は計塩はかりしほを売れば、文吉は葉蓂はなむぎ荇せい」を売り、「竜之助は虫嚙齒むしくはばの妙薬をうり、弟虎之助は小間物売の負箱に編笠かぶり」、屋形町を探る。ある時、虎之助は、酒機嫌やうきげんの奴の乱暴を避けようとして、「廿あまりの女房」と知りあい親しくなる。(その女は、正体不明ながら、私娼を業とする者のごとくに描かれている)。女は、虎之助の小間物売の負箱に大脇指があるのを見つけて事情を問う。虎之助の話聞いた女は、敵久四郎が「外門二重・三重、番所、かりそめには出入なりがた」い所にかくまわれていることを語り、久四郎が妾を求めていることを利して妾となり、手引きをして敵を討たせようと約す。妾となった女と虎之助は使いの下女の鬻うりに手紙を入れて「状を取りかは」して機会をねらうが、女は久四郎の子を「懐胎して」「男子を安産」、奥様に直される事態となり、虎之助らを「反り討にさせん」と心もゆれる。が、思い直して虎之助らを手引きして敵を討たせ、自らは子供をさし殺して自害する。虎之助は、「彼女の事を思ひやりて、叡山にのぼり出家」する。

右のような簡単な紹介によっては伝えがたい面白さを持ち、『伝来記』中でも秀作と評しうる巻八の一ではあるが、この部分についてはこれまで、二つの方向からの典拠の指摘がなされ、あい入れない形で並存している。すなわち、一は、後藤捷一氏「史実に表れた

る上方の敵討」(上方・47号)によって指摘された寛永十六年の京四条河原町の曾我九之助の敵討なる史実であり、一は、後藤丹治氏『中世国文学研究』で指摘された御伽草子『あきみち』を典拠としそれを翻案したと見る見方である。そして、前者は前田金五郎氏『武道伝来記』の事実と創作(文学・昭41年10月号)において支持され、「御伽草子『あきみち』の影響とする説(後藤丹治氏説)は誤りであろう」と、後者は簡単に退けられている。一方、江本裕氏『西鶴武家物についての一考察』(国文学研究・34集)では、後者が支持・確認せられ、前者についての言及は行われていない。(おそらく前者を無理な説として退けられたのであろう)。

ともあれ現在、右のような両説が併存しているわけだが、今ここで両説を詳細に検討し直している余裕はない。が、今便宜のため前田氏の要約に従えば、

肥前島原の城主松倉長門守勝家の家臣、勝浦左近兵衛が、同僚の川澄八郎兵衛夫婦を討って出奔した。そこで、八郎兵衛が母方の祖父に当たる親族関係の曾我九之助と、三浦十五郎との両人が、諸国を尋ね廻って、ようやく敵の所在をつきとめた。敵の左近兵衛は、京都の四条河原町で遊女屋を営み、変名して関東屋武太夫と称していた。

そこで、九之助の姉は、難波と名乗り、その母あい(八郎兵衛の娘)と共に、関東屋に奉公して機会を窺っていた。が、そのうちに、母のあいは、ついに武太夫(左近兵衛)に身をまか

せるに至った。ついに時が来て、敵討の時、あいつも一太刀を負わせたが、敵と契った身を恥じて、自害したという。(岩波文庫本解説より)

とまとめられている寛永十六年の曾我九之助の敵討は、本当に巻八の一の典拠と称しうるようなものかどうか。

事件の起った場所、登場する人物の名が全く違っているのは、『伝来記』が他でもそうしていると見られる以上、ここで問題にする必要はないかもしれない。又、本章が何年のことか全く分からぬように書かれている点(ただし、中で描かれている風俗は一六八〇年代のもので、約五十年前の寛永十六年のものではない)も、今問題にする必要はないであろう。さらに、この史実を記しているのが、西鶴よりはるか後の文献で創作も加わっていると見られる点も問題にしないこととする。が、そのような点を除外した上でこの敵討の史実を見直してみても、巻八の一と一致する所は、ごくわずかということになるのではないか。

まず、敵討ちに出る人物関係が余りにも異なっている。敵が遊女屋という人の出入りする家業を営むことも又全く異なる。姉・母が敵の所に奉公する点は似ているとも云えようが、これ又人物関係が大いに相異なる。敵と契った母の自害という結末も、共通するといえ云えるという段階を出ない。いわば、人物関係の相異を無視し、状況をすべて黙殺して、敵討側の女が敵に奉公して敵情をさぐるうちに敵と契り敵討後に自害したという風に話の抽象化を行った時に

のみ、共通している部分があるということなのである。この程度のものを典拠とした史実と認めてしまうこと自体が、いささかならず無理ということになるのではないか。

これに比べた時、後藤氏、江本氏の云う『あきみち』の方は、より多くの共通性を持つように見うけられる。敵が厳重な警戒の下にあること、それ故に女が愛する男のために敵の所に奉公に出て敵情をさぐることに、敵と契りを結び子供ができること、女も男も出家するという結末(女が自害に至らぬことは相異するとも云えようが)、すでに両氏による指摘もあること故に省略するが、いわば巻八の一の話の展開の眼目となっている右の部分が共通しているのである。

従って、前述の史実のわずかな一致を種として考えることにくらべ、『あきみち』の翻案と見て話を当世化する作者の手腕をうかがう方が、はるかに簡略な手続きによる論証を行いうること、明らかである。本稿(上)で記したような疑問を、史実に典拠を求めようとする立場に対して抱く私は、ここでも右の史実を典拠と見る立場を退け、むしろ、前田氏の「誤りであろう」とする『あきみち』翻案説に左袒せざるを得ない。

見る立場によって見えるものが違ってくる、これはいはば当然のことだが、『伝来記』の場合、というより西鶴作品全体をも含めて、これまで、見る立場が、史実・事実の導入といった視点に片寄りすぎ、身近な古典などを自在にとり込んで見ると見る立場を十分に生

かせない研究状況があったのではないか。この点については、(上)でも一部記したが、右の一例を見れば明らかなごとく、時には、史実・事実などとは無縁に西鶴が話を創っている可能性のあることを、もっと考慮に入れて考えてみる必要もあるのである。

私は、右の巻八の一を一例とすることで、見る立場によって見えるものが違う、従って、立場を時に変える必要のあることをここで確認し、次章ではまず、史実・事実などとは無縁に創作していると見られる事例をとりあげ、そこから生まれる問題点について触れることにしたい。(なお、巻八の一の場合、竜之助・虎之助なる幼い兄弟の敵討、長年の苦勞、二人の従者の存在、虎之助の恋といった、人物設定や趣向等には曾我物の世界が用いられていると見られ、使いの下女が鬻の中に文を入れて厳しい詮議をのがれる所には『源平盛衰記』巻十一の有王が元結の中に文を結び込めた話を利用して見られる等々、『あきみち』以外の古典などを翻案・利用している部分もあると思うが、本稿では、それらの点を含めて巻八の一の創作方法を全体的かつ具体的に問題にする余裕がないので、別の機会にゆずる。なお、この点については、新日本古典文学大系『伝来記』の拙注でも簡単に触れているので、御参照たまわれば幸である)。

七

巻三の三「大蛇も世に有人が見た様^{たのめ}」は、「予州宇和嶋」での豪華な当世風の遊興の様子を描くことから始まる。

手繰の綱をおろさせ、女まじりに今や引くらん。五端帆の舟式艘を、出嶋の宿の縁の前迄釣揚げさせ、潮を湛へて、数の魚を放ち、是ぞ正真の沖鱸、入日を金柑に見なし、浪の浮藻を水鉢に作り、此気色は、下手な仙人より増に……

と書かれる遊びぶりは、まさに太平の御代の当世風俗を導入して描かれているごとくであり、少しく誇張した表現の中で、以下の場面の生まれる場所が設定されている。おそらくこ^(注1)こは、本章が、『伝来記』中には稀な、時代設定を記す部分のない作品なるが故に(ということは、カムフラージュを行っていないということだが)、とりわけ当世のことと読者に受けとめられて読まれることにもなったであろう。しかし、当時の宇和嶋にこのような豪華な遊びが存したか否かは定かではない。

ともあれ、その遊びが高じて、「小船に棹さし、盃流しの一曲を興じてうたふ所に、俄に海上震動して、白浪舟をゆりあげ……」といったことになるわけだが、ここの「小船に棹さし」が、謡曲「舟弁慶」の「小船に棹さして五湖の遠島をたのしむ」を引いたものであり、「盃流しの一曲を……」が、謡曲「安宅」の「おもしろや山

水に、盃を浮べては、流に引かるゝ曲水の、手まつさへぎる袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。本より弁慶は……たべ酔ひて候程に……」の場面を背景に用いていることは明らかであろう。とすれば、当然読者は、「俄に海上震動して、白浪舟をゆりあげ……」の所で、「舟弁慶」の知盛幽霊出現の場面を思い起こし、それを転じつつ話を作って行こうとしているのだからという予測を持って読み進めることになる。

が、「白浪舟をゆりあげ」て現れ出でたものは、知盛の幽霊ならぬ「竜」であり、「水より少し下に五丈ばかりの竜、うねり廻るを、見る者肝をけし」といった場面になるわけである。おそらく読者は、ここの「竜」の出現によって、別の著名説話が導入されていることに気付くであろう。すなわち、捕われた文覚上人が伊豆に流された折に遠州沖で船に災する「竜王」を静めたという、『源平盛衰記』『平家物語』その他に伝えられる話である。（ここでは、当時『平家』以上に良く読まれていたと思われる『源平盛衰記』を比較の対象とする）。

『源平盛衰記』巻十八の「文覚清水状天神ノ金ノ事」では、「遠江国名田沖」に船がさしかかった時、

折節黒風俄ニ吹起リ、波蓬萊ヲ上ケレバ、コハイカミセント上
下周章騒ギケリ。思々ニ仏ヲ念ジ祈事シテ泣悲ミケレバ、……
イトゞ波風烈シクシテ為方ナケレバ、声ヲ揚ゲテゾ喚キ叫ビケ
ル

西鶴作品における典拠の問題（下）

と、船中の狼狽ぶりが記されているが、巻三の三では、ここが、太平の御代の憶病武士の「周章」ぶりに転じて拡大され、以下のように面白おかしく記述されることになる。

見る者肝をけし、船頭をあらけなく呵りて、「こんな所へ乗せて来るものか。夕の夢見あしき（『源平盛衰記』巻十八「文覚高雄勸進」に「ア、去ヌル夜ノ夢見悪カリケル事ハ此事也」の語がある）に、こまいといふたを、女共が『それでは約束の義理が欠る』といふて、此様なこはい目をさせる」と啼出すと、着物みなぬぎて、大小にくよりつけ、横鼻樫まで放して、泳ぎ支度をする。

また、かたはらより「扱も残りおほひ事は、瓢箪をもつて来れば、まぎ／＼と水を飲では死ぬ物を」と悔む。「何も心にかゝる事はなけれど、祝言してから十日にならぬ女ばうが、晩から淋しからふ」と、涙ながら我屋敷の方を詠めやり、「とてもこち共は、水心はしらぬ」と、手を懐に入れて、舷に寄りかゝつて、念仏くりかへし、「彼観音の力を念ぜば、浅き所を得ん」と、読出すも有。船頭を呼べば、「最、御ゆるされましょ。目が舞ひまして」と、船底に息もたてず。

右の各所には、『源平盛衰記』前引部分以外のものも利用されていると見られるが、これが、文覚説話の船中で狼狽する人々の様子を描く所を中心に転じていることは明らかであり、ここで書かれていることが実話か否かなどを穿鑿して見る必要すらないであろう。

おそらく西鶴は、当世の武家が日比は威丈高（「船頭をあらけなく
呵りて……」にその一面を示唆したのであらう）、しかし実は憶病、
そんな侍が多いのだということを、文覚説話の一部を種に虚構し、
それを読者に感得させようとしているのである。

さらに、右の部分に続けて、船中唯一の勇士を登場させる。

其中に石目彈左衛門、鱸先に立ちあがりて、大躬鎧を上段に構
へ、大音あげ、「正躰いかなる物ぞ。此治れる時津波、太平の
御代にあやしき姿、天晴、僻者^{くせもの}なるべし」と、海上を白眼^{にらみ}つけ
たる有様のゆゑしき。ふしぎや大蛇、淡路が嶋の方へゆくとみ
へて、気色しづかに浪おさまり、みな／＼夢の覚めたる心ちし
て、又、右の汀に遭ぎ戻し、からき命を我物にしてあがりぬ。

右の「石目彈左衛門」（石のごとき目でにらんで竜を弾き返した
男の意の擬人名か）が、文覚上人を転じたものであることは、もは
や詳細な対比を要すまい。それは船中皆狼狽する中で一人泰然たる
文覚が、「舟ノ舳頭^{へッポ}ニ立跨ッテ沖ノ方ヲ睨^{にら}ヘテ」龍王を「嗔^いリ」付
けると、「沖吹ク風モ和ギテ岸打ツ浪モ静也。其時ニコソ舟ノ者共
ハ安堵シツ、穴貴シ／＼」と文覚をあがめることとなったという、
『源平盛衰記』の話の展開を思い起すのみで十分であらう。（なお、
西鶴が『伝来記』の右の部分を書く時、『源平盛衰記』巻十八の文
章を一々参照しながら書いているとは思われず、おそらくは記憶に
存するものを種に転じかつ譌案しているのであらうから、辞句を
一々に対比すること自体がさしたる意味を持たないとも思われるの

で、ここでは、細い部分の対比は省略に従う）。

かくて、この船遊びの折のことが「城下には沙汰」となり、彈左
衛門は賞讃され、憶病武士二人が「夕の夢み、十日にならぬ祝言」
と「はやり詞」にまでなつて噂されることが敵討の原因となるわけ
だが、本稿では、以下の部分にまで触れる必要はないであらう。こ
こでは、巻三の三の発端部が、史実や事実などを典拠として書かれ
てゐるわけではないこと、むしろ、謡曲「船弁慶」「安宅」を利用す
るのかと読者に思わせることを契機に、わずかながら「船弁慶」と
類似の構成を持つ、文覚が竜王を退散させる話を飄転して読者の意
表をつきつつ興味を惹き、当世（と同時に当世の憶病武士）によく
ありそうな話に仕立てて武家の一面を諷するという書き方をしてい
るということを承認していただければ十分だからである。

紙数の関係もあり、少しく乱暴な論じ方になってしまったが、前
章にも触れたごとく、一つの立場から見ようとして行けば、そのよ
うに見えてくるという事例は多いのである。行きすぎへの警戒は常
に必要だが、今とりあげた巻三の三のような方法で虚構が行なわれ
ていると見られるものは、『伝来記』中他にも少くないように思わ
れる。すでに『武道伝来記』（新日本古典文学大系）の拙注で一部
触れたように、曾我物説話や『源平盛衰記』『太平記』などを始め、
近い所では『新御伽婢子』（天和三年刊）などの話までも、虚構化
するための材料として用いていると見られるようなのである。従来

とはあえて逆の立場をとることになるわけだが、(そしてもちろん、前出の江本氏、矢野氏も一部で同じ立場をとっているわけだが)、それによって見えて来るものも思いの外多いとすれば、それを行って見る必要も大いにあるのではないか。こじつけの感をいだかれる程に無理をする必要はないと思うが、『伝来記』の方法が拙論のごときものであるとすれば、この方向からの追求が一層必要となるように思われるのである。

しかし、西鶴の虚構の種をどのようなものに求めたらいいか。前述の諸作品、たとえば『曾我物語』を始めとする曾我物の諸作品、『源平盛衰記』や『太平記』、御伽草子や謡曲、古浄瑠璃などの敵討に縁のありそうなものは、いわば当たりをつけやすいものである。それ故に、締切り期限のある仕事ゆえ不十分ではあったが、短い時間で文字通り率読して、気づいたものは、前記の拙注に記してみた。しかし管見の範囲はごくわずか、又、そう云えば云えるという判断は見方によって異なるから、見落しも多数あったに違いないし、拙注出刊後、気のついたものも少くないといったありさまである。従って、近年の克明な研究を得意とする研究者が見直せば、おそらくはまだ数多くの指摘が行なわれうること、確実であると思う。今後を期待したいところである。

が、西鶴が利用しているものは、右のごとくに当りをつけやすいもののみとは限らないであろう。西鶴の立場からすれば、何を種としても自由なはずだから、その読書範囲にあるものであれば、(場

合によっては、その内容を人から聞く可能性があるのでありさえすれば)何であつても良いことになる。従って、その範囲はすこぶる広く、当りをつけようもないわけだが、当面は、西鶴が良く読んでいたと思われるものを見直し、それとの関連を洗い直してみるといふのも一つの方法ということになるのではないか。

いさかならず偶然を期待する感じではあるが、そのような予測から試みてみたところ、思いの外に関連を見ることができのではないかと考えられるものの一つが、『源氏物語』であった。本稿では以下、右のような追求を行う上での具体例の一つとして、『源氏』のみに対象を限定しつつ、論を進めて行くことにしたいと思う。

八

西鶴が『源氏物語』をどの程度に深く読んでいたかは問題だが、梗概書で内容を知るといった程度をはるかに超え、熟読と称するに足る読み方をしていたと見ることは許されるであろう。『一代男』の翻案においても、『諸艶大鑑』二の二の言説や他の作品での受容のあり方からみても、それを証することは容易であるように思われる。^(注4)

しかし、敵討を話題とする『伝来記』と『源氏物語』という取合わせは、いかにも一見珍妙である。もっとも、巻二の一では敵討の途中の母子が石山寺に参詣して紫式部の源氏の間を見るといった記

述、巻六の一には、腰元や妾に『源氏物語』の巻名を付けるといった話があり、そこには当然これまでも『源氏』との関連が指摘されているわけだが、『伝来記』の話の内容や記述にまで『源氏』が影を落している可能性などは、その内容の懸隔がはなはだしいために、全く考えられていなかったといっているであろう。一見珍妙な取合せと称するゆえんである。

しかし、例えば右の巻二の一「思ひ入吹く女尺八」で、敵を探し求める母と子とが、たまたま西国海道から浜松へと向う途中とは云え、突然のように

石山寺に参詣して、紫式部が源氏の間を、長崎の道者開帳し給ふを、結縁に拝みて、「古へは、かゝる女も有りしよ」と、女の身には殊更に感じて、心静かに下向するに……

といった場面が設けられることには、どんな意味があるのだろうか。「古へは、かゝる女も有りしよ」と「女の身には殊更に感じて」とは云つても、ここで『源氏』を紫式部が書いたことを、敵討の途上にある「女の身」が「殊更に感じ」る必然性はなさそうであり、珍妙とまでは云わずとも、唐突な印象はまぬがれたい。普通であれば、敵討に縁のありそうな場所を出し、そこで敵討の成功を祈る等ることがあつてもよさそうなところである。にもかかわらず、紫式部であり『源氏』なのであり、西鶴は、この場面で、ともあれ読者に『源氏』のことを思い起こさせようとしているのである。何のためなのか。

西鶴に限らず、何かのより所（典拠）を求めて作品に利用しようとする作者が、何らかの形でそれを作中に示そうとするのは、一般的な方法である。云うまでもなく、作者が読者に信号を送らなければ、読者はその受けとめようがないわけだから、その示唆（信号）の出し方は種々様々であっても、どこかでそれを示しているであらうし、そのような信号をとらえない典拠の指摘は、当然あやしげなものということにもなりかねないであろう。

ところで今巻二の一では、右のごとくに、必ずしも必然性のない所で読者に『源氏』のことを思い起こさせようとしている。とすれば、これは、西鶴が読者に送る信号の一つと見ることもできるのではないか。西鶴は巻二の一を『源氏』と関連づけて見てもらいたいのではないか。あらためて、この作品を見直してみる必要があるだろう。あるが、それは、以下のような話を発端部とする。

安芸の広嶋では蹴鞠がはやっていたが、福嶋安清宅での「七夕の興行」に、「今年十八、角前髪ながら、美道の花の香残」る鳥川村之助も加わっていた。「漸々暮もつま」る頃、鞠が「横ぎれ」して、隣家の花畠に落ち、唐萩の枝にとまっている。村之助はそれを求めて、「笹の葉わけてのぞく」と、「隣屋敷の息女と見へて、紋羅のしろきに紅の裏を付け、桧扇のちらしがた、大振袖のゆたかに紫糸の組帯、しどけなく結びて、乱れ髪の中程を、金の紙の平鬘にしめよせ」た娘が、「織女の歌を手向け」て「沢水に浮けて立帰らるゝ面影」が見える。村之助は、「天人の生移しか、と心も空になり、前

後かはまず詞をかけ、鞠をとってもらうが、鞠をさし出す娘の「手をしめて、互に面を見合せける社恋のはじめなれ」ということになる。

「彼娘（小督）も、殿めづらしく恋をふくみ」、二人は「わりなく物いひかはし」、村之助は「身を捨てて通」うようになり、二人の恋は「逢ふたびに物はいはず、泪に更けて別れを惜しみ、次第につのるばかりだが、「情の日数かさな」り、娘は「思ひの種とまりて」、「腹臍^{はらな}おかしげにな」ってしまふ。

一方、それを知らぬ娘の親は、参勤交替の帰途、浜松の甥甚平を娘の婿としてつれ帰り、殿への「養子の御訴訟」もかなって、祝言を急ごうとする。が、娘は「仰せをそむくは、不孝の第一なれ共、思へばかりの宿の夢と極め、仏の道の有がたく、後の世を願ふなれば……」と出家を口実に甚平との祝言を断り続ける。

とかくするうちに、「此きたつゝむにあらはれ」、甚平も「少しは口惜しく」、村之助が忍んで来るのを待伏せして切殺す。娘（小督）は「長刀振って」甚平を討とうとするが、乳母にとめられ、乳母とともに出奔して「明石の里」に身を隠して男児を生み、村之助は「蜜通かくれなく、武命の尽とさみせられ」、甚平は広嶋を去る。

（甚平は、殿に願ひ出て正式に小督を妻とすることを認められてゐる立場だから、村之助を討つたのは妻敵討同然のことであり、お咎めを受けることはない。また、小督は屋敷に残っていれば、お咎めを受けねばならぬ立場ゆえに出奔し、村之助は「さみせられ」るこ

とになるわけである。従つて、後に小督がその子村丸とともに甚平を敵として討つのは、公に認められる敵討ではなく、いわば私憤をはらすための非公公式の敵討である。この話のように、『伝来記』中には、現実には敵討と認められない話が多いのだが、そのことから生ずる問題は別の機会に詳論する予定である）。

右が、巻二の二の前半部のあらましだが、この話の展開によつて思い起されるのが、『源氏』若菜の上・下以下に展開する柏木と女三宮との話である。紙数の関係もあり、一々の対比は省略に従うが、鞠の場における日暮れ方の見染め、その場での武家娘というよりは御所方風の娘の描写、「わりなく物いひかは」す二人、女の妊娠、女に正式な養子契約があり夫を持つのと同じ立場であり世間からは二人の関係が不倫と見られること、女が口実とは云え出家を強く願うこと、男の死、男児の出産といった話の展開や人物関係が重なりあっていることは明らかであろう。もちろん、当世の話となつてゐる以上、異なる部分があることも確かである。しかし、西鶴は、すでに見たごとく、後に信号を送るかのように『源氏』のことを読者に思い起こさせ、さらには「明石」に女を逃れさせ、出産した男児を「須磨寺につかはし手習ひ」をさせるといった風に、読者が『源氏』に思いを致すような書き方をしてゐるのである。巻二の二の前半部は、『源氏』の柏木と女三宮の話を当世風に作り変えて敵討の発端を虚構化したものと見るのできるのではないだろうか。

さらに、前引の石山寺の場面は、村之助の旧友が、村丸の姿が村

之助そのままのを見て話しかけ、甚平を敵としてねらい続けていること、甚平が吉野の山里にいるのを知って討ちに行く途中であることを語る、という偶然の出会いの場に行き行く途中であることよく出来すぎた話の展開であるが、石山寺の場面で『源氏』を思い起こしている読者は、右の偶然の出会いに、『源氏』玉鬘の巻における初瀬寺参詣の際の玉鬘一行と右近との出会いの場を思い浮べることになるであろう。都合のよすぎる偶然の出会いを読者にさりげなく納得させるべく、ここでも『源氏』の話を背景に置いていると見ることができのではなからうか。

同様のことは、巻六の一「女の作れる男文字」の場面にもいえるように思う。前述のごとく、巻六の一は、妾や侍女の名に『源氏』の巻名をつけるという部分の見られる作品だが、そのことが、読者に『源氏』を他の部分でも用いていることを示唆する働きをしているように思われるのである。

巻六の一は、「岡崎の奥に楽隠居をかまへ」る随夢なる老人のこの上ない豪華な暮しの描写から始まる。そこでは「銀燭のひかる源氏の名をうつし、須磨、やどり木、花散里、うつせみの夜のころもをかざらせ、あれにもこれにも手懸女は、いたづらの昼も蘭帳のうちに、房付枕ゆたかに：世にあらざらん諺調のみ。花清宮もこんな事なるべし」と記されるように、光源氏の六条院での栄華な暮しを、当世風の好色な奢りぶりに転ずるような描写が行われている。この部分は、藤の裏葉の巻などでの光源氏の栄華を意識して書かれてい

ると見ることができそうである。

かくてその家の主随夢は、その屋敷の中の多勢の「手懸女」の中でも、一橋なる女を寵愛しているが、薄雲と称する妾がそれを妬み、一橋あての恋文を男文字で作らせる。その文章は、「あひなれて後の思ひを書きつけ」たものであったが、随夢はそれを見て「ことの外にせかせられ」、「女臈がしらの木幡」の弁訴をも聞かず、一橋を拷問し、果ては惨殺することとなる。

これが、巻六の一の敵討（一橋の妹による）の発端となる話だが、随夢の見付けた手紙の内容が密会後の恋しい気持を伝えたものであり、それを見て「ことの外にせかせられ」たという話の展開から読者は、『源氏』若菜・下で、女三宮にあてた柏木の手紙を光源氏が発見して思い悩む話を思い浮かべることになるであろう。とりわけ、前述のように、巻六の一の冒頭部は、六条院での光源氏の栄華を転ずるごとくに描かれており、それをうけて話が展開しているわけだから、手紙が重要な小道具として用いられている柏木・女三宮の話を思い起こしやすいのである。ここでも西鶴は『源氏』を用い、その虚構の種として翻転していると見て良いのではなからうか。

やや乱暴な記述によって、『伝来記』中に『源氏』のことを持ち出して来る（いはば読者に信号を送っていると見られる）二章を見て来たが、他にも、話の展開や趣向の類似を云うことで『源氏』と結びつけることが可能な作品もありそうに思われる。しかし、無理をして結びつければ、本稿（上）で史実を種と見る方向に対して行

った批判が我が身に返って来ることは確実、ここでは、見やすい若干の例を補足して置くのみにとどめることとする。

例えば、前章でとりあげた巻三の三には、「其夜は、五月雨ふりすさみたる、つれ／＼のしめやかなるに…」友人四人が集って憶病侍の噂をするといった場面がある。当然読者は、『源氏』帚木の著名な一文「長雨晴れ間なき頃……つれ／＼と降りくらしして、しめやかなる宵の雨に…」を思い浮べ、『源氏』の文辞を利用して雨夜の品定め場面をどう転じるかに興味を抱きつつ読み進めることになるのであろう。そしてそれが、『源氏』の世界とは全く無縁な敵討の原因となる場面に転じられるという意外な展開に興味を惹かれ、西鶴の『源氏』の転用ぶりを楽しむことになるはずである。

また、右のような文辞をとり用いてその場面を思い起させるやり方とは異なるが、『源氏』の中の場面・描写の面影をとって作中に生かしていると思われる例もいくつかある。巻三の二には、

以前、此所に化物屋敷とて、同心町のすまに、歴々の屋形に、人住まずして荒れわたり、梢の秋になりて、紅葉の盛枝に見ながら、人も手折らず、萩・薄おのづからにみだれ、唐鳶道を閉ぢて、狐・狸の遊山所となり、松にとまり鳥もおそれて、百年も此内を見た人もなく、語り伝へり。

といった描写があるが、これなどは、蓬生の巻の「浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒を争ひて生ひのぼる」や「もとより荒れたりし宮のうち、いと狐のすみかになりてうとましく、け遠き木立に

梟の声」といった末摘花邸の描写を頭におき、その面影を生かして俗文化しつつ書かれた描写と見ることができよう。

また、巻一の二では、一子誕生後に愛妻が病死し、主人公が悲嘆にくれるという話を雅文調の文体をも採り入れて描いた後、いかなる縁の深きにや、今に妻の事忘れ給はねば、をの／＼内談して、「せめては御思ひ晴しにも」と、色盛りの艶女あまた取りよせ、御寝間のあげおろしに、風情つくりて出しけれども、更に御心も通はず、あたら姿のいたづらに過ぎ行きける。

といった話が展開する。右の部分までのストーリーが、桐壺の巻を思わせるものであることは云うまでもないが、引用した部分が、桐壺の

年月にそへて、みやす所の御事をおぼし忘るゝをりなし。なくさむやと、さるべき人々をまゐらせ給へど、なずらひに思さるゝだにいとかたき世かなと、うとましくのみよろづに思しなりぬるに：

の部分で当世化しつつ取り入れている趣のものであることは明らかであろう。

このような例は、他にも指摘できそうであるが、それらがことごとしく典拠などというべき程のもでないことは承知している。が、『伝来記』のような内容の作品においても、その場面設定や描写の過程で、西鶴が『源氏』を意識して書いていることを云うための一証とすることはできるのであろう。

一見珍妙な取合せと見られる『源氏』と『伝来記』ではあるが、それらの間には、(右の指摘のすべてが無効と云われたいとすれば)思いの外関連があるように見うけられる。私などは恥かしながら『源氏』を卒読している程度、『源氏』を精読・熟読している者から見れば、他にも多くの関連が指摘できることになるかもしれない。が、それは今後の課題として、ここに『源氏』との関連を考える時、より大きな別の問題、すなわち『伝来記』の創作方法そのものと関わるのではないかと思われる問題がある。結論を先に云えば、それは、当時の一読者として当時の読み方で『源氏』を受けとめることによって西鶴は、『伝来記』の創作意図や方法を生み出す上で何らかの示唆を受けているのではないか、ということである。

私は、『源氏物語』の受容と西鶴(国文学研究・百三集、平成三年三月)なる拙論において、『好色一代男』跋文、『西鶴織留』自序、『萬の文反古』自序などにかがえる西鶴の文芸意識は、『源氏物語』蜚の巻の物語論を西鶴の立場から受容することによって成り立っているのではないか、と推論した。それは、当時行なわれている『源氏物語』の注釈書で論ぜられる『源氏』の「主意」とされるもののうち、権威づけを行っている部分を取り払い、蜚の巻の

物語論の原点に立ち返るものであった。すなわち、「偽」「すゝろごと」「はかなしごと」という物語に対する批判があることを承知している紫式部、一方「転合書」「慰み草」「世間のよしなしごと」「見ぐるしき」ものと自らの作品を認定する西鶴、にもかかわらず「世にふる人の有様」を云うことに意味を認めその虚構化の方法までも論じる紫式部と「世の人心」を面白く可笑しく描きあげるこの意味を自覚する西鶴、といった対比を行うことができ、その共通性を十分に確認することができるものである。

詳細は前記拙論を御参照いただきたいが、少くともその文芸の意味を自覚する上で西鶴は、諸注釈書で権威づけられる『源氏』の「本意」よりはむしろ、蜚の巻の物語論全体を受けとめてそれを受容していると見られる。が、物語と浮世草子の意味づけといった原理的な次元の問題では共通していても、西鶴は、それをどのような方法で具体化して行くかを右の序跋等で語っていない。また、個々の作品において、「人の心」をとらえるための創作の方法は、それぞれに異なっているようにも見うけられる。余りに当り前のことながら、右のように原理的なものとしてその文芸の意味を自覚するとすれば、それを面白く可笑しく読ませるためには、素材を、方法を種々に変えて行かねば、マンネリに落ち入ってしまうかねないからである。従って、西鶴の作品の方法を一般論として問題にすることには、さしたる意味がないことにもなる。やはり、個別に各作品の方法を問題にせざるをえないのである。

とすれば、当面の対象である『武道伝来記』は、どのような方法で「人の心」（とは云ってもこの場合は武家ということになるが）を描いていると考えることができるのか。そしてそれは『源氏』の方法（それも当時行なわれている注釈書類が指摘する方法）といかにかかわることになるのだろうか。

『武道伝来記』の方法については、本稿（上）でも少しく触れたが、その特色の一つは、おそらくは当時の出版取締り令を意識するが故に、時代を慶長以前（豊臣氏を滅して徳川政権が確立する以前）と設定していることであり、それ以前の西鶴作品に見られるような現代小説として書かれてはいないということである。が、それが一種のカムフラージュに過ぎず、あくまでもその内実は、太平の御代の当世の武家の姿や「人の心」をとりあげているものであることは、本稿（上）でも略記した所であり、それゆえに『伝来記』が「浮世草子」としての実質を名実ともに確保したものとなっていること、云うまでもない。

一方『源氏』に対しては、近世初頭以来行なわれている板本や諸注釈書の引用する『河海抄』『料簡』の「物語の時代は醍醐朱雀村上三代に准ずる欤」という時代設定で書かれた「作物語」の形をとっているという見方が、諸注釈書に共通していることは周知である。西鶴もまた『源氏』が、約数十年前のこととして仮構するという時代設定によって書かれた作品なることを十分に承知していたであろう。しかもそれが「作物語」のならひ、大綱は其人のおも影あれども

行跡にをきてはあながちに事ごとにかれを模することなし」（河海抄・料簡）といわれるごとくに、作り物語としての虚構を自在に加えたものであるという点も十分に認識していたと見てよいであろう。

しかし『源氏』が、時代を数十年前にとりつつ、実はその作品の成立時の「人のありさま」を描くという方法のものという読み方をしていたかどうかは問題であろう。むしろ『河海抄』以後、「一條院を桐壺御門に准じ又光大臣伊周を光源氏に擬するなどいふ一義もある欤、皆以謬説也」（河海抄・料簡）と云われるように、当代の人物をその作品のモデルと見る見方は厳しく退けられている。が、「准據」の時代を「いづれの御時にか」とおぼめかす以上、その時代を当世とする見方が否定されるのは当然である。従って問題は、そこに描かれる「人のありさま」が、「昔物語」の形を借りつつ、どの程度に当世を描いているととらえられていたかということになるであろう。が、「昔物語」「作物語」に仮構した「寓言」という方法によって書かれたという近世初期に共通する考え方に立てば、「准據」の時代は数十年前であっても、そこに当世の「人のありさま」が「寓」されていると見られるのは当然ということにもなる。「いづれの御時にか」という設定に、「作意あらはれざれば、傍（謗）人の難をもおはず」（『弄花抄』、『岷江入楚』他の注にも引かれる）という評が生まれ、「いづれの御時にか」という『源氏』の時代設定が、作者のカムフラージュだというのとらえ方が生まれる所以である。

やや強引な結びつけ方のごとくだが、「寓言」として書かれた「昔物語」という当時に一般的な『源氏』への認定、その時代を数十年前にとり、「其人のおも影あれども行跡にをきてはあながちに事ごとにかれを模することなく、「世に経る人のありさま」を自在に虚構して描き、当世の人を描いているという非難を避けるという『源氏』への見方を思う時、『伝来記』は、その方法の一部として、当時の『源氏』の読みをもとにする方法のとりえ方を継承しているという見方がここになり立つのではないか。

さらに、『伝来記』では、事件の場所や人名が仮構され、話の種が分割されて利用されたり改変されたり、さらには古典などが自在に導入されて虚構化が行われている。いわば「作物語」とするための方法が、多方面にわたって用いられているわけである。そして、その「作物語」の方法によって、西鶴は、当世の武家の「人の心」を描こうとしていると見られることは前述のごとくである。そこには、自在な虚構を行いながら、当世の実相をあらわにする、すなわち、虚によって実を示そうとする姿勢が明確に存しているようにうかがわれるのである。

一方、螢の巻の物語論の後半部に記される物語の方法論が、『河海抄』以来「莊子が寓言」と称されていることは周知である。そしてそれは、『明星抄』の説（『明星抄』は明歴二年以前刊。その説は、『首書源氏』『湖月抄』等々に踏襲、引用される）に従えば、次のごとくに敷衍されることになる。

莊子が文法は名を作り出して、我云ひたき事をいはせたり。其云ふ処はことごとく実の事なり。今此物語に云ふ処の源氏も、其真実を尋ねれば其人なし。書きあらはす所は実也。されば莊子が筆をまのあたりうつせり。（引用は『源氏物語古注釈叢刊』第四巻により、一部送り仮名を補った。なお、『首書源氏』は『細流抄』よりとして引く。『湖月抄』も引用）

要するに、虚なれども実、というこれ又余りに原理的な文芸の方法の指摘ということになるが、当時理想とすべき第一等の散文文芸である『源氏』の方法が、虚によって実を示すというあり方をしていうことは、おそらく西鶴にとっても十分に意味を持つことになったはずである。自在な虚構を加えて話を作りあげて行くことによって、実在のものを実在のものらしく描く以上に実（真実）を獲得しようという見本が、目の前に、しかも最高の権威を持って存在していたからである。『源氏』の時代と当世とで、その内容は全く異っても、その方法は基本的な所で通底していると見て良いのではなかろうか。西鶴が、当時の『源氏』の読み方、その方法のとりえ方を受容しつつ、『伝来記』の方法を生む契機としていたのではないかと推測する所以である。

また、右のような方法を用いつつ『伝来記』の西鶴が、当世の武家のありようを厳しく諷する姿勢を保持することは、拙稿『武道伝来記』における諷刺の方法」（李刊江戸文学・2。平成2年2月）において強調したが、そのような姿勢（方法）も、当時の『源氏』

の読みと関連づけることができるであろう。

『河海抄』がすでに「寓言」を称し、「凡物語の中の人の人のふるまひをみるに、高き賤きにしたがひ、男女につけても人の心をさとらしめ、事のおもむきを教へずといふ事なし」と云っているように、『源氏』が「寓言」によって人の「教へ」ともなるというとらえ方は、螢の巻の物語論を權威づけるところから生まれていることは云うまでもなく、以後の注がそれを拡大・強調することになっていることも周知である。それは、儒・仏の両側面から行われ、時に折衷されるわけだが、『明星抄』（『首書源氏』、『湖月抄』等もそれらを引用）では、右の「寓言」の敷衍の後、

さて又人の善惡を褒貶して、此物語にしるし出せる所は、左伝を学べり。孔子の春秋をしるさるゝ心は、善をしるす所は、後人を善道にいさみをくはへてすゝましめんため、惡をしるすは、後世に見ごり聞きごりに懲すべきため也。されば、勸善懲惡といふ、是也。此物語の作者の本意是なり。（同右）

とまで強調せられることになる。このような読み方を、西鶴はどのように受けとめ、自分の作中に生かしているというべきであろうか。私は、別稿の中で記したように、西鶴が自らの文芸意識をとらえる場合の環境や状況、またその資質から見て、またも「勸善懲惡」などを意図するとは考えることができない。もちろん、『本朝二十不孝』以後、一見その形をとっている作品を書いてはいるが、それを文字通りの「本意」と見るのは難しいと考える。^(注6) 浮世草子は、

西鶴作品における典拠の問題（下）

さ程に大それた物ではなく、それ故に面白く可笑しいものなのである。しかし、權威を持たぬ西鶴作品に世を諷する意識、「人の善惡を褒貶」する姿勢を見ることは、少くとも可能であろう。それによって人を教えるとはでは考えず、『左伝』や『春秋』にならおうといった意識まではなくとも、「褒貶」し諷して楽しむ（それによって読者を喜ばす）ことくらいは、文芸の「本意」の一つと西鶴が考えていると見たとしても云いすぎとはならないであろう。私は、『伝来記』以後の、とりわけ武家の世界に材を求める作品にその姿勢を強く感得する。

もちろんそれは、当時の『源氏』の読みを受容せずとも可能、という見方もあるかもしれない。が、前述のごとく『源氏』は、理想とすべき第一等の作という評価が定着しているものなのである。その方法を学ぶ上で、そしてそれを自らの作品を書く上での一つのやり所とする上で、この点においても当時の『源氏』の読みの一部を自らの方法として生かしたと見ることができるのではなからうか。「寓言」と偽りとは異なるぞ。うそなたくみそ。つくりごとな申しそ（俳諧団袋）なる西鶴の言葉はよく知られているが、単なる「偽り」「うそ」「つくりごと」ではない「寓言」とは、虚によって実を感得させることであるにちがひなく、同時に、実を感得させるための「寓」する過程に当然「褒貶」、さらには諷諭が生まれることも確実である。私は『伝来記』を書く西鶴の意識の中に、「寓言」を生かす姿勢をかいま見て、それを『源氏』受容の一側面と考えざ

るをえないのである。

以上、いささかならず駆け足の記述となってしまうたが、西鶴が、散文文芸の理想としての『源氏』の文学意識や方法（の当時のとらえ方）を、自分が作品を書く時の一つの理想型ととらえ、その方法の中から自らに生かせるものを取り入れつつ内容を当世に移して書くというやり方をしていたと見ることができないかと思う。もちろんこれは、普通の意味で典拠とは称しがたいであろうが、文芸意識や方法の面で『源氏』の受容（もちろん当時の読み方を含めた上での）が、思いの外に大きな意味を持っていたと云ってもよいのではなからうか。

十

史実に典拠を求めることが、『伝来記』のような方法で書かれている作品の場合、すこぶる困難に思われることを論じ、むしろその虚構化の過程をまず問題にすることの必要性を強調して、主として『源氏』との関連について触れて来た。もともと本来、本稿のねらいからすれば、『源氏』以外にも触れうるものを出来るだけ多くとりあげねば十分にその意を尽せぬことになるわけだが、紙数に制限がある以上、それについてはもはや別の機会に言及する以外にない。そこで本稿では最後に、右において『源氏』との関連を見た点を中心に、今後の課題とすべき若干の問題を略記するのみで稿を終える

ことにしたい。

一、『源氏』との関連を細部においてとらえることも今後必要だが、それ以上に大きな問題として、西鶴にとって文学とは何であったかを考える際、当時の『源氏』の読み方が、思いの外に大きな影を落している可能性を考えねばならないと思う。右の検討は、いささかならず大雑把な論述に終始してしまったが、当時、文学とは何であったかを考える時の規範の一角が『源氏』であった以上、同時代の他の作者の作品をも含めて、文芸意識や方法の問題を『源氏』の受容とからめて考えてみる必要があるであろうのである。もとより西鶴についても、より綿密、詳細な検討が必要であることは、云うまでもないことであるが……。

二、近世前期の文芸思潮等をこれまで問題にする際、主としてその時期に書かれたものを中心に問題にすることが多かったが、右のような『源氏』の受容のあり方を見る時、文芸思潮を構成する重要な要因として、『源氏』などの当時の読み方を問題にすることにも、十分な意味が出てくることになる。と同時に、当時書かれる散文系の俗文芸を生み出す文芸思潮は、むしろ『源氏』の当時における受けとめ方を前提に考えた方が、実態をつかみやすいようにも思える。その点についての検討も、今後の課題となりそうである。

三、作者は、理屈より作品そのものに学んで自らの作品を書く場合が多いことは常識に属する。当然、近世前期の作者たちは『源氏』そのものを模倣しようとはしない。そこから受けとめるものと対決

し受容しつつ、その作品を作って行っていると見るべきであろう。従って、西鶴のみならず、仮名草子、浮世草子の作者たちの『源氏』やその当時の読み方に対する対応ぶり、その作品の対応の様相等を、個別に問題とする必要があるということになるであろう。近世前期に『源氏』が持っていた重みは、種々の側面から見直されてしかるべきなのである。それは単に翻案の対象となるのみではなく、当時の作者たちにとって文芸を考える上でのもっとも基本的な存在であったことを忘れてはならないというべきであろう。

注

- (注1) 拙稿『『武道伝来記』の時代設定』（『浮世の認識者井原西鶴』所収）参照。
- (注2) この点については、『武道伝来記』（新日本古典文学大系）の拙注に一部略記した。
- (注3) 注1の拙稿及び拙稿『『武道伝来記』の一面』（文学・昭和59年12月号）など。
- (注4) この点についてやや詳しく触れ、さらに西鶴の読んでいた注釈書やテキスト等についても本稿で触れる予定であったが、紙数の関係で省略する。
- (注5) 「仮名草子・浮世草子と『源氏物語』」（勉誠社『源氏物語講座』第八巻所収）
- (注6) 拙稿『『本朝二十不孝』論序説』（『西鶴研究序説』（新典社刊）所収）